

航空会社の価格戦略

商学部 教授 田邊勝巳 たなべかつみ

2014年4月から2016年3月まで、ニューヨークはコロンビア大学に留学する機会を得た。塾からは少なくない定額補助金を頂戴したが、運悪く円安で、NYの不動産価格はバブルかと思えるほど高騰し、古くて手狭で眺望も何もないボロボロな部屋の初年度の家賃で、頂いた補助金は跡形もなく消えてしまった。企業からの駐在員は家賃の自己負担はなくマンハッタンの一等地に居を構えるのに対し、研究者は狭隘物件に住むか、ニュージャージーなどの遠隔地から大学に通った。

留学で得た得難い経験は、これら金銭的損失を補って余りあるものであったが、とにかくお金がない。そのため、学会出張などは外部資金が命綱であったが、想定外の出費も重なり、旅費に充てる予定の資金がみるみる減っていく。日本に一時帰国する際も、どのように帰国するのが一番安いか、必死に情報を探した。ちょうどフィリピンのセブ島で学会があり、NYからの運賃を検索すると、成田経由のセブ島便で10万円ほどであった。これは安い。しかし、同じ航空会社の成田直行便はそれより3万円以上高かったと記憶している。

この理由は至極簡単で、NYからセブ島へのルートは数多く存在する（競合路線が存在する）のに対して、NY東京直行便は、それほど多くない。セブ島は観光客が多く乗る路線であり、ニューヨークにとつてセブ島だけがリゾート地ではない。一方、直行便は移動時間が最も短いため、ビジネスマンのような時間価値の高い層に生まれ、かつ彼らは経費で乗る。前者は価格に対して弾力的で、後者は価格に対して非弾力的になる。こうした価格の反応度の違いが、いとも簡単に費用差を覆したのである。

とは言え経便は安い。結局、私が選んだルートは、オスロの学会を經由地にして、オスロからイスタンブール経由の成田便であった。早期の予約割引で合計1850ドル。確かに安い。しかし用務を終え、日本からNYに戻る際には34時間35分を浪費した。交通経済学を専門と名乗って、この有様である。



留学したコロンビア大学

談話室

教員によるエッセイコーナー